

受領者投稿

## 「やりたい研究」を支える研究助成

東京大学大学院工学系研究科機械情報工学専攻 教授 中村仁彦  
(第3回 受領者)

平成4年度に「人間と機械の知的コミュニケーションに関する研究」というテーマで財団法人立石科学技術振興財団の支援を受けました。昭和62年から平成3年までカリフォルニア大学サンタバーバラ校に在職した後、東京大学に移って1年が経ち、ようやく東京での暮らしと、勤めに慣れてきたころでした。大阪の生まれで京都大学出身の私にとって京都の財団から支援をいただくことは、故郷から「元気を出せ」といわれているようで、大いに勇気づけられる思いがしました。アメリカは私のいた当時、80年代後半からの不況の真っ只中で研究費の獲得は競争的でした。駆け出しの研究者にとって自分の最もやりたい新しい研究を始めるために研究費を探してくるのは、ほとんど奇跡的でした。応用的な研究への小額の研究費をもらうために、ロスアンゼルスのコソソーシウムで何人もの企業のマネージャを説得する競争は、若手研究者のエネルギーを消費させるには十分でした。

センサを多く使って知的なロボットを作ることは既に、計算機科学出身のロボット研究者にとっては言い古されたパラダイムでした。制御を背景としてロボットの研究に携わっていた私は、この問題に対する既存の研究を物足りなく感じていました。視覚センサや処理装置は値段が高く、使い方も計算機が専門でない私には敷居が高く、きっかけが無いまま何年も経っていました。財団法人立石科学技術振

興財団からの支援は、この芽を出すことなしに本棚に忘れられていた研究の「種」に、さわさわと水をかけてくれました。何やらやりたいことをできる自由な気分にさせてくれました。

この研究は私に一つのきっかけを与えてくれました。現在は、平成10年度より科学技術振興事業団の戦略的基礎研究推進事業の領域「脳を創る」の一プロジェクトの代表者として、ロボットと脳型情報処理に関して研究を行っています。「種」を「実のなる夢の樹」にするべく「最もやりたい研究」をやる自由を楽しんでいます。

